

再び多賀墨卿に答ふ

三浦晉安貞

終日馳つて其の到处を得ざるは、馬力の罪に非ず、実に途を取るの非なり。臟腑の説、漢と西洋と精麁有りと雖も、未だ條理に得ず。晉之を説くこと数万言、猶未だ藁を脱せず。而も子問うて已まず。之に答へんと欲すれば、則ち短簡の盡す所に非ず。答へざらんと欲すれば、則ち殆んど友誼に負く。秦伯龍の南に還るに託して一二を陳べ、以て其の責を塞がんとす。夫れ臟は肉なり。腑は皮なり。腑以て内を保ち、臟以て外を営む。蓋し天地は一氣物。物其の体を虚実にして以て天地を開き、氣其の性を陰陽にして以て水火を活す。虚体は大物の府たり、実体は大体の蔵たり。水火其の間に網縷して、及ち動と植とに化す。其の故に動植は元一の分、意の有無・機の動止を反すと雖も、俱に之を天地の給に資る。是の故に臟腑の理は、若し近く譬へを取れば、則ち之を一顆の粟粒に觀るも、亦之を已に通ずるに足るなり。蓋し粟の物たる、稔能く米を保ち、米能く稔を営む。稔米相得て生意其の中に通ず。稔米相失へば生意其の間に絶ゆ。之を其の給する所のものに極むれば、則ち天転じて以て地を保ち、地持して以て天を営む。之を人間に推すに、人能く室を営んで居り、室能く人を保つて立つ。唯物分るるを以て其の態を異にするのみ。是を以て人身は一臟一腑、臟は則ち内に在るの肉、以て能く氣を蔵し、腑は則ち外に在るの皮、以て能く質を容る。古への人内景を取つて以て之を外体に融す能はず、故に皮肉を外に歸し、臟腑を内に歸す。立言固より然ると雖も、之を天地に融せば、則

ち臟腑と皮肉とは同一物、以て有意を用ふるの文を分ち、終に皮肉臟腑の別を致す。故如となれば則ち咽胃腸脬、皮にして物を裹み、漸く肛門を踰えて身首を包む所の皮と合す。臟は鬻を皮肉に為し、筋脈以て之を維ぐ。動植已に意の有無を隔つ。無意なる者は用意の文を用ひず、有意なる者は用意の文を用ひざるを得ず。是に於て植は臟腑の目無く、而して動は皮肉の文を兼ね。蓋し人身は頸を以て上下の体を分ち、上に耳目鼻舌の文を具えて彩声臭味の氣を皮裏に交へ、下に手足陰乳の文を具へて配嗣器地の質を皮表に接ふ。内にしては、咽胃腸脬、皮を以て水穀便溺の質を納蓄收送し、心肺肝腎、肉を以て天地神本の氣を保運化持す。故に臟腑は本別体、其の同じからざる。猶衣と絮とのごとし。故に其の本は一臟一腑、各々内外に分れて二臟二腑と為る、又各々親疏の用を拈げて二臟二腑と為る。古への立言は、臟腑の内に在るを知つて、外に在るを知らず。其の内なる者も亦目の触るる所に従つて数ふ。剖折の理の反して合する所有るを知らず。其の臟を五とし、数へて合せざれば則ち又其の臟を六とす。是に於て其の統ぶべき所にして反つて之を剖ち、其の剖つべき所にして之を合す。其の剖つべき所にして之を合すとは何ぞ。咽は以て能く水穀を納れ、其体常に虚、胃は以て能く水穀を畜へ、其体常に実。其の数ふるに當つてや、其の実なる者を拾つて其の虚なる者を捨つ。腑は一條の皮囊、岐に膀胱有り、但し外来を畜ふるの客質なり。而して膽は腑と相与らず。膽は屬系にして其の系は上は肝臟に属し下は胃口に著く、精を飲食の氣に化し、脈の根を為す。臍の天氣を収め息の原を為すと対す。蓋し児の胎に在るや、宮中の卵体は氣を其の中に閉し、天息地食に仮ること無し。唯一條の臍帶、胞を繋ぎで以て母と血脈を通ず。生動活育、唯斯の一路に恃むこと、菓蓀の葎營養を本幹に承くると同じ。其の已に胎を出づるや、混沌正に死し、臍帶已に断つ。竅を天門地戸に闢き、嘔噎已に通じ、飲哺已に求む。是に於て先天の養は移つて後天の室に居す。是に於て榮養の氣膽より起り、衛護の氣臍に朝宗す。故に膽は天に後

れ、而して臍の天に先んずるの氣を斷つ。而るに説者取つて以て腑に属せしむ。顛倒錯置も甚し。其の統ぶべき所にして之を剖つとは何ぞ。命門は腎の一辺、脾は肝の一片。臟有れば必らず薄膜有りて之を包む。何ぞ特に心に於てのみ包絡を立てんや。耳目鼻舌は系皆心に繋がる。而るに説者之を五臟に配す。是れ実徴を失すと雖も、猶其の本とする所を言へり。手足臍乳に至つては、則ち汎くして問はず。其の佗、肝は本右に著く。而るに之を左に著くと謂ひ、脾は本胃下に在り。而るに之を上在りと謂ひ、脈と經とは同じく心に出でて氣質の分あり。而るに知らず、唯憤憤として説くの類の若きは、復た枚挙すべからず。夫れ儒は三才に通ずるを以て自ら負へども、人の形骸を觀るに至つては之を医典に譲つて察せず。医人無識、素靈周季は佞者の妄言なるを知らず、造物者の之が為に面授口訣する有るが若くに意ふ。五行の配當の若きに至つては、則ち最も能く人の耳目を糊す。人身に氣液骨有り、何ぞ必らず木火土金水有らんや。而して佗の四行に於ては則ち之を一とし、火に於ては則ち君相を分ち、以て造化の枢要と為す。無用の辨、不急の口。聚訟譏讒、聾聵耳に盈つ。是れ猶行者の路を越に於て問ふに方つて、標を掲げて北と曰ふがごとし。是に於てか轅を北して越を走る途を取ること愈々遠く其の迷ひ愈々深し。亦悲しからずや。然りと雖も千古の成説、人皆目を茲に濡らし、心を茲に染む。未だ猝かに以て條理を示すべからず。故に今は唯子の為に言う。諸を傍人に遺して他の鬪を致すこと勿れ。其詳しくは姑らく著はす所の成るに俟たれんことを。

安永己亥四月望

- 三枝博音著『梅園哲学入門』（第一書房、一九四三年六月、第一刷）所収。
- 旧字は新字改めた。
- 読みやすさのために、適宜新かなで振り仮名をつけた。
- PDF化にはL^AT_EX_{2 ϵ} でタイプセッティングを行い、dvi_{ps}fnxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。